

## わたしたちにできること

陶器 浩一

環境建築デザイン学科

“竹の会所-復興の方舟-”は、宮城県気仙沼市本吉町において、地域に生息する竹を使って学生たちが自力で造りあげた建築である。津波で集会所を流された集落において、地域の人たちに自由に使ってもらえる“憩いの場”になればという想いで、現地在住の知人や地域のみなさんと共に準備を進め、学生たちが自給自足でキャンプ生活を送りながら完成させた。

ここでは活動に至った経緯、今回の活動を通じて感じたことについて記したい。

### ■きっかけ

仕事を通じて旧知の仲の造船鉄鋼業、高橋工業さんが津波で壊滅的な被害を受けられた。高橋さんは造船技術を活かした卓越した鉄の建築技術で建築界に新風を与えてくれた方である。建築のなかまで高橋工業応援団を結成し、震災ひと月後に見舞ったとき、「自分たちのことよりも、息子たち、孫たちに胸を張れる地元を残さなくてはならない。」という高橋さんの言葉に強く胸を打たれ、津波で「みんなが集まる場所もなくなってしまった」とお聞きしたとき、私たちに何ができるかと悩みながらも、このプロジェクトを決意した。

震災後、流された集会所の再建や修理を行政に要望しているものの、早くても4年かかるだろうとの回答だったとの事である。

私たちに資金力も権力もないが、学生たちの若い力、エネルギーがある。

設備もない仮のものであるが、学生たちが力を合わせて“憩い”の場をつくり、少しでも地域のみなさんのお役に立てれば、という想いからであった。

### ■試行錯誤

早速大学に帰って話をしたところ助教の永井拓生



さんや多くの学生が賛同してくれ、気仙沼と大学を往復する日々が始まった。以前イベント会場を竹でつくったが建築は初めてである。今までの研究蓄積に加え、地域で生息する竹を現地で調査し、大学に持ち帰って実験・検討を繰り返した。竹の接合は地元の漁師さんや農家の方のお知恵も拝借し、学内で実大モックアップもつくって急ピッチで設計を進めていった。

確認申請は仮設建築物、集会所として確認を得た。供用期間は4年、木造等（竹造）延床面積175㎡の建築である。竹の構造はおそらく前例がないが、3年前から研究を積み重ねてきた竹構造の実験、研究



結果と、今回の検討内容、プロジェクトの経緯を建築主事にご説明したところ意気に感じてくださり受け付けてくださった。

## ■二転三転

我々の提案が地元住民全てにすぐに受け入れられたわけではない。当初、2つの自治会が共有していた集会所近くに計画したが、自治会間の被害格差が問題になった。この集会所は大きな被害は免れたものの修理もできずに放ったらかし状態になっている。仮設とはいえ別の場で建設するという事は、被害の大きかった地区を見捨てることになるという意見である。隣の地域は集会所が完全に流失し、地元の伝統芸能「平磯虎舞」の練習場もなくなったと聞き、場所を変更した。ところが、行政に申請する前日の寄合でストップがかかった。設備や備品が整っていなければ使いにくい、行政が建ててくれるまで待とう、という住民がいたらしい。震災直後は同じ被災者だったのが、時間が経つに連れ温度差が出始めてなかなか意見が一つにまとまらない。合意形成ということの難しさを痛感した。

結果、自治会のものとしては建てないことになったが、自宅も父親も津波で失った男性が、自分の土地の提供を申し出てくれた。長年続く網元のお屋敷で、父親が亡くなった場所を、である。「完全な集会所を最初から求めるのではなく、できることから少しずつはじめませんか。何もしないと何もはじまらないのだから。私の土地で良ければ使ってください」と笑顔でおっしゃられたがその奥には相当の覚悟があったはずである。



## ■学生たちの頑張り■嵐を乗り越えて

9月、10月にかけて合計28日間、高橋さん宅の裏庭にテントを張らせていただいてワークショップを行い、建設を進めた。学生は滋賀県立大学生24名をはじめ、早稲田大、神戸大、宮城大など全国から集まった大学生や社会人の有志、延べ70名余りが集まってくれた。

学生たちは旅費も生活費も道具も自前の完全ボランティアである。募集時に「参加すれば単位認定になるのでしょうか」と聞いてくる学生もいたがそれなら結構と断った。

志が高い学生たちが集まっているので結束力も固

い。工事はすべて手作業で難航を極めた。急斜面での約1000本の竹伐り。基礎代わりの土嚢に使う600袋16トンの土の袋詰め。約10m高台にある敷地への車路は津波で流されているので竹をはじめ資材はすべて人力で持ち上げあげなければならない。竹フレーム構築もすべてロープで縛りあげるので時間がかかる。

自主的に朝6時作業開始を申し出て遅れを取り戻してくれた。嵐の中でも泥だらけになりながら黙々と作業を続けた。そして、ようやくフレームが立ち並んだと思ったときに台風の直撃を受け、建て方途中のフレームはなぎ倒されてしまった。それでも学生たちは諦めなかった。



### ■虎舞披露■子どもたちの笑顔

10月23日は参加した学生たちにとっても一生忘れられない日である。

地域の方々から、学生たちのひたむきな姿へのせめてもの感謝の気持ちとして、竹の会所竣工の場で、平磯虎舞の震災後の初練習を披露したいとの申し出があったのである。

当日は朝まで降っていた雨もピタリとやんで晴れあがり、100名近い観衆と共に賑やかな会となった。

演奏後、集まった子供たちが竹のデッキを走り回ったり、寝転がったりする姿が印象的だった。本当に地域の役に立つかという不安も抱きながら来たので、子供たちの満面の笑顔と元気な姿は、ここまでやりぬいた学生たちの心にずっと残って行くと思う。

工事中、毎日のように現場を訪れる男性がいた。上棟式の餅まきの時にはご祝儀を持ってきてくれ、竣工披露でも真っ先に「これからは私たちがこの建物を大事にしてゆきます」と声をかけてくださった。その方が、当初一番反対されていた方だと後で聞いたときは込み上げてくるものがあった。



## ■わたしたちにできること

今回の活動にあたり、高橋さんと私が固く決めていたことがある。それは、この地を“復興のシンボル”≒観光名所にはしない、ということであった。海沿いの国道に面していることもあり、工事中、全国紙やTV局など多くのメディアが取材に来た。が、以前からこのプロジェクトの経緯や事情を理解して下さっている方以外はすべて取材をお断りした。興味本位で取り上げられては、却って地域のみなさんの迷惑になるからである。

今回の活動を通じて痛感したのは「そっと寄り添う」ことの難しさである。「被災者の立場になって」というのは易しいが、いくら分かったつもりでも被災者の心にはなりきれない。頑張りたくても頑張れない人もいる。忘れようとしても心の傷が癒えないひともいる。人それぞれペースが違う。そういう方々に如何に向き合い、如何に寄り添えばいいか。正解はないが、常に考えなければいけない問題である。

## ■これから

“竹の会所”は地域のみなさんに使っていただける状態になった。しかし、まだ電気も水もない。供給可能になったとして、維持費をどこから捻出するか。自治会で維持するだけの体力はまだないし、可能だとしても他の集落の人が使いにくくなる。個人に頼るには負担が大きすぎる。行政に頼っても埒が明かない……。そんな話を高橋さんとしていた時、傍らで聞いていた学生たちが“竹の会”をつくりませんか」と声を上げてくれた。今回参加してくれた学生たちが主体となって全国から会員を募り、竹の会所を維持してくれる。

「ひとりひとり小さな力でも、みんなの力を合わせれば、大きな力となります。この自力建設プロジェクトを通じてそれを実感しました。・・・4年間は整備・メンテナンスなどこの会所を通して、地域の方々と未来を築ける場をつくり続けようと思っています。・・・この会所を通して、私たちの想いとみんなの想いが形となり、気仙沼の方々の心の支えとなれば幸いです。」

“たけとも”と名付けられた会 (<http://yaplog.jp/taketomo2011/image/1/1> 参照) の設立趣旨文に書かれた一文である。

## ■おとなのしごと

現地最後の夜、高橋さんが「君たちは大人の仕事をしてくれた。本当にありがとう」と涙を流された。素人の学生が手造りで造ったもので、もちろん見栄えも使い勝手も悪く、とてもプロの仕事と言える代物ではない。では何が「大人の仕事」だったのか？

曰く、「大人の仕事とは人のためにする仕事。子供の仕事とは自分のためにする仕事」だそうである。打算も思惑も見返りもなく、ただ地域のためになればという学生たちの純粹なところ。そのところが地元の人に通じたのだとこの時感じた。今回は復興支援という特別のものかもしれないが、私自身忘れかけていた、仕事をするということの原点を学生たちの姿に教えられた気がした。

